

ミトンの手

「この食事、おいしいわ、ケイラ。作ってくれてありがとう。」 アンジェラが、ドリスとプリシラといっしょにおもちゃのテーブルで食べるまねをしながら言った。

「イタリアの米料理でしょ？ 何て言うんだっけ？」 ドリスがたずねた。

「リゾットよ。」とケイラが答えた。

「ヒルズ姉妹は来ないのかしら？」 プリシラがたずねた。

ケイラは顔を曇らせた。「それが……。何を作ってるのかって聞くから、リゾットよって言ったら、じゃあ二人はサラダにするわって。」

「そうなの。でも、どっちみち、あの二人、今夜は外食するから、だいじょうぶね。」 アンジェラが気をつけて言った。

「アナベルは？ どうかしたの？」 プリシラがたずねた。

「別に。ただ、おなかが空いてないの。」

「おなかが空いてないですって？ でも、今日はビデオを見ながらポップコーンをつまんだだけで、他には1日中何も食べてないんじゃない？」

アナベルは肩をすくめて言った。「ただ、おなかが空いてないのよ。」

「でも、せめて野菜くらいは食べないと。」

アナベルはため息をついて、にんじんをスプーンにふたさじほど自分のお皿に取ったが、一口食べると、両手をテーブルの下にかくした。プリシラは頭をかしげた。

その時、ドアをノックする音がして、「どうぞ」と返事をすると、がっしりしたあごと黒いビニールのかみの毛の、ハンサムな小麦色のビニール顔がドアからのぞいた。

「ケン！」 ケイラが声をあげた。

「バービーとベブは？」 ケンがたずねた。

「ヒルズ姉妹の新しい家にいるわ。」 アンジェラが答えた。

「二人は今日の約束のこと、知ってた？」

「もちろんだわ。それで、もう2時間も、服を着替えたり、かみの毛をとかしたり、お化粧したりしてるのよ。」

「たったの2時間かい？ じゃあ、まだ少なくとも1時間は待つてことだな。まあいいさ。ゆっくりするから。」

「もう夕食は済んだ？」 ケイラがたずねた。

「いや、まだだよ。ヒルズ姉妹を夕食に連れてくことになってるからね。だけど、二人が飲み食いするものといったら、脂肪ぬきのサラダにゼロカロリードリンクだけだからな。ぼくがスープ以外のものを腹につめこもう

ものなら、さげすんだ目で見られるんだぜ。参るよ。」

「そうなの。ケイラがおいしいイタリア料理を作ってくれたんだけど。・・・何て言ったっけ？」とアンジェラ。

「リゾットよ。」とケイラ。

「リゾットだって？ そりゃ、いつでも歓迎だな。それに、今はクマみたいにおなかがペコペコなんだ。」

「ぼくはちがうよ。」 ブルーノがぼそっとつぶやいた。

「分かったわよ、ブルーノ。はちみつや糖蜜以外のものでも、おいしく食べられないってわけじゃないでしょ。」とアンジェラ。



ケンが リゾートを ガツガツと 食べ始めて 5分と たたないうちに、バーバラと ビバリー・ヒルズが すまし顔で 部屋に入ってきた。

「あら、食事に出かけるんじゃない？」とバーバラ。

「あー、うん、そうだよ。」 ケンが答えた。

「私達が 勧めたの。誘惑には 勝てないわ。」

「もう。」 ヒルズ姉妹が すねた 顔をした。

「そんなものを 食べたら、ウエストが どれだけ 太くなるか、分かっているわよね。」とバーバラ。

ドリスが 言った。「そんなの、ばかげてるわ。これは 健康的な 食事よ。体に いいはずだわ。それに、人形は 太ったり しないもの。」

「でも 最近、実際には 太るんだって 話よ。」とビバリー。

「最近の ダイエット雑誌に 書いてあったもの。」とバーバラ。

「まあ、大変。どうしたら いいの？」とケイラ。

「つまり、ベルみたいに、『ノー』って 言えば いいのよ。そうでしょ、ベル？」 ビバリーが 言った。

「ええ・・・、そうね。」 アナベルは 心配そうな 顔で 自分のお皿を見つめながら 言った。

「何に『ノー』ですって？」 プリシラが たずねた。

「脂肪に 対してよ。」 アナベルが 口ごもった。

「私達、もう 行かないと。テーブルを 予約してあるの。遅れる わけには いかないものね。」

ケンは さらに 2、3口 かき込むと、もう 訳なさそうに ほほえんで 席を 立った。

「じゃ、行ってくるね。」 ケンは アナベルに ウインクして ささやいた。

「それからね、ベル。ねる 前に あれを チェックするのを 忘れないようにね。」 ビバリーは そう 言うと、バーバラと 部屋を出て行った。ケンは ぶらっと 二人の 後に 続いた。

「何を チェックするの？」 プリシラが たずねた。

「ヒルズ姉妹の 家にある 体重計よ。」 アナベルが ぼそっと 答えた。

「あら、こわれでも したの？」 ドリスが たずねた。

「こわれてないわよ。たぶんね・・・。」とプリシラが 言った。



プリシラは、アンジェラと ドリスを ろうかの 方に 呼んで 言った。「私、アナベルの ことが 心配だわ。彼女が アイスクリームを 食べないなんて。もう 2回目よ。」

アンジェラが 言った。「お年ごろなのかしらね。最近 鏡ばかり 見つめているわ。だけど、ヒルズ姉妹みたいに

満足気に 見るんじゃない、不安そうな 顔で 見てるのよね。」

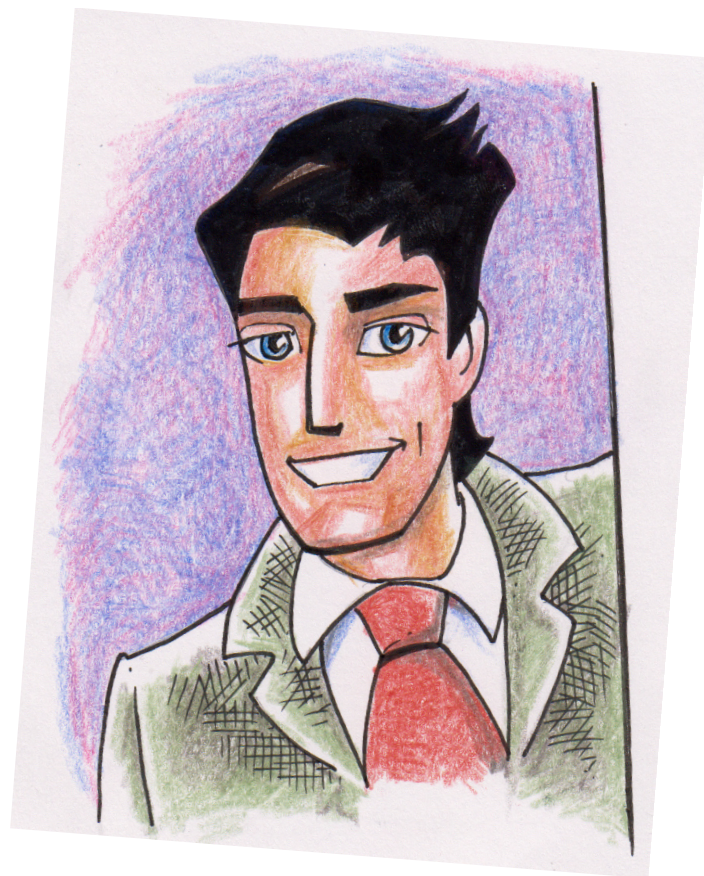
「そうそう。1日 心配そうな 顔をしているわ。」 ドリスも 言った。

「確かに そうね。それに、変なのよ。夕べ 彼女を ねかせに 行ったら、手を 後ろに かくして すわっていたのよ。ケンが 部屋に入ってきた 時も、そうだったわ。」とプリシラ。

「そう 言えば そうね。私も 気づいたわ。だけど、特に 何とも 思わなかったの。彼女に 何か 言った？」

「どうして そんなこと してるのって 聞いたけど、答えないのよ。」

ドリスが あごを こすりながら 言った。「うーん。アナベルは ヒルズ 姉妹と いっしょに いることが 多いわ。そのせいで 自意識過剰に なってるのかしら。」



その日の夕方、プリシラがたずねてもアナベルが答えなかったの、ケイラが後で教えてくれた。
「それはね、彼女の手がミトンだからなの。」
「一体 どういうこと？」

「この前ヒルズ姉妹がみんなの手について、いろんなことを言ってたの。もちろん、ブルーノやノウジーやシュンバの前足は別よ。それで、私の手のことは、とてもステキね、彼女達の手ほど長くて上品ではないけどって言ったの。私は構わないわ。彼女達みたいに神経質になりたくないもの。だけど、その後アナベルの手を見て、クスクス笑ったのよ。」

「まあ、ひどいわ。」 アンジェラが言った。

「そうなのよ。するとビバリーが、アナベルの手はミトンだって言ったの。」

「ミトンの手ですって？ 一体、どういうこと？」 プリシラが思わず声をあげた。

それを耳にしたアナベルが、わっと泣きじゃくり始めた。「私は、ヒルズ姉妹みたいに指が長くて細くないんだもの。それどころか、指が全然ないのよ。」

「だけどね、アナベル。あなたはそうのように作られているの。個性的で特別なよ。」

「じゃあ、また工場にもどされて、完全に作り変えてもらいたいわ。」

部屋を片付けていたドリスが、それを耳にして言った。「まあ大変。だって、そうしたら私達、あなただって分からなくなってしまうもの。私達みんなが大好きなアナベルじゃなくなってしまうわ。」

「みんなが私のことを好きなわけじゃないわ。」 アナベルが言った。

すると、ケイラとノウジーとブルーノとシュンバがいっせいに言った。「ぼく達、アナベルが大好きだよ！」

「でも、ヒルズ姉妹はちがうわ。」

「ヒルズ姉妹だって、あなたが大好きだわ。ただ・・・その表し方がちがうだけよ。」とプリシラが言った。

「ケンだって、あなたが好きだわ。」 ケイラがにやにやしながら言った。

「そんなの、でたらめよ。」とアナベル。

「ホントだってば。彼はあなたが好きよ。彼が来る時は、私にはほとんど何も言わないけど、いつもあなたに話しかけるじゃない。」

「それに、私も気づいたんだけど、帰る時には必ず、あなたに『じゃあね』って言っていくわよね。」
ドリスも言った。

すると、部屋のドアが開き、ケンとヒルズ姉妹がぶらりと入って来た。

「ただいま。今町から帰ったよ。だけど、ぼくはうえ死にしそうだ。」とケンが言った。

「うえ死にですって？」とバーバラ。

「ケン！」 ビバリーも言った。

「ホントだよ。おなかがペコペコなんだ！ リゾット、まだ残ってるかなあ？」

「たくさんあるわよ。あっためてあげる。」 ケイラがぱっと立ち上がって言った。

「やあ、ベル。」 ケンが声をかけた。

「お帰りなさい、ケン。」 アナベルが顔を赤らめて言った。

「おや、どうしたんだい。・・・泣いてたのかい？」

「ちょっと問題があつてね。」 プリシラが小さな声で答えた。

「それは気の毒に。それにしても、『アナベル』って、すてきな名前だよ。プリシラが付けてくれたのかい？」 ケンがたずねた。

「ええ・・・。うーんと・・・それは、私がプリシラへのクリスマスプレゼントだったからなのと、私が『クリスマス人形アナベル』のお話に出てくるお人形に似ているからなの。」

『『クリスマス人形、アナベル』だって？ そりゃ、ふしぎだなあ！ それは、ぼくが小さかった時に姉さんが大好きだったお話なんだ。もちろん、ぼくじゃなくてね。だけど、ぼくはその名前が大好きだったんだ。」 ケンが声を大にして言った。



「私達、もう ねるわね。」 バーバラ・ヒルズが 冷ややかに 言った。

「ええ。私達の 夕べは、新たな 展開 になってきたみたいだしね。」

「おっと、いけない。」 ケンは 自分の 頭を ピシャリと たたいて 言った。「ぼくは 時々、すごく にぶくてね。君達が そこに いたことに 気づきさえ しなかったよ。あー、 待っててくれたのにね。」

「いいのよ。私達は もう 用が 済んだんだから。あなたは おしゃべりしてたら いい わ。」と バーバラ。

「それに、とても お楽しみのようだしね。私達、あなたの お楽しみを ぶちこわそう なんて、さらさら 思わないから。」 ビバリーも 言った。

ヒルズ姉妹は フンと 鼻を 鳴らし、頭を ぶいと 上げて、自分たちの 家へと 急ぎ足で 去って行った。

ヒルズ姉妹が 出て行くのを 何気なく 見送ると、ケンが 話し続けた。「それで、アナベル。君は 読書が 大好きだって 聞いたけど。」

アナベルは はずかしそうに うなずいた。

「すぐに 分かったよ。君は、いばったり お高く とまったり しないけど、すごく 頭が いいってね。何を 読むのが 好きなんだい？」

「うーん、そうねえ・・・古典や 歴史的な 恋愛小説、聖書物語なんかね。伝記も 大好き。」

ケンは 深く 考えながら うなずいた。「ねえ、教えてくれないかな・・・。」



「あの 二人、まだ 話してるようね。ケンが まだ 帰ってないもの。」 ドリスと プリシラ と いっしょに キッチン を 片付けながら、アンジェラが 言った。

「そろそろ アナベルの ねる 時間だからって 言ったほうが いいんじゃない、プリシラ。」と ドリス。

ちょうど その時、キッチンの ドアが パツと 開いた。

「ケン！ 帰るの？」 プリシラが ほっと したように 言った。

「ああ！ おそくなって ごめんよ。つい 話に 夢中になっちゃってね。ベルは、何でも し 知ってるんだ！ ぼくが 全員の 愚か者に 感じちゃうくらいね！」

「ごめんなさいね。アナベルって、一度 話し始めると、止まらなくなってしまうのよ。」

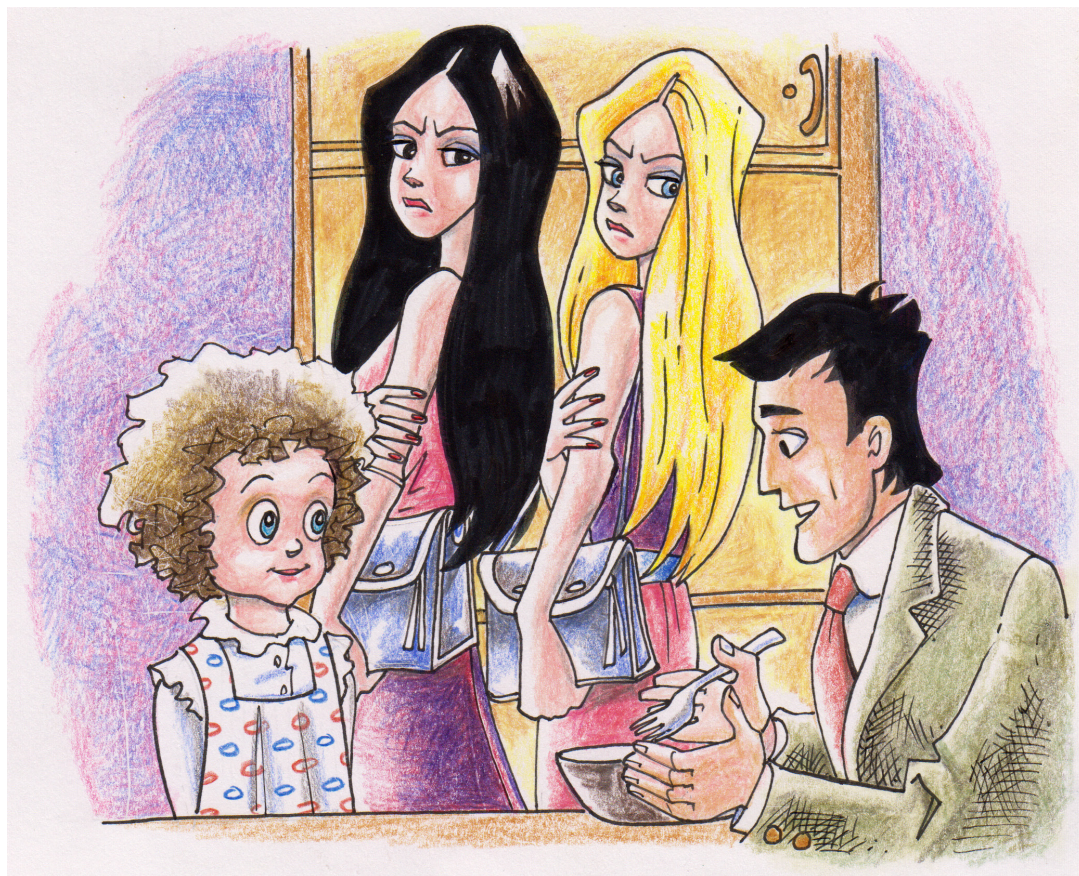
自分の 思ってることを 聞いてくれる 人が いるとね。」

「全然 問題ないよ。最高に 面白い 会話を したんだ。こんなのは 久しぶりさ。大衆文化や 政治、歴史や 人文科学に いたるまで、あらゆる 分野について 話したと思うよ！ だけど、ヒルズ姉妹と きたら、ヘアケアや メイクに ファッション、ダイエット、美容体操なんかについて、延々と 議論し 続けるんだ。」 ケンは、あきれた 顔で 少し 苦笑いを しながら 言った。

「ふーん。彼女達の 会話は、少しばかり かたよっているわね。」と アンジェラが 言った。

「だけど、男の子が 興味を持つことも 話してたわよ。」と ドリスが 言った。

「そうだね。ロックスターとか、スポーツとか、筋トレとか、車の ことなんかね。だけど ぼく達は、別の ことを 話したいんだ。ぼくたちは どこから 来たのか、どうして ここにいるのか、これから どこへ 行くのか？ 神様って、どんなだろう？ 実際、神様 っているんだろうか？・・・そんな ことを、今夜 ベルと 話したんだ。」



「想像できるかい？ 二人の美人姉妹と町で夜を過ごし、超退屈で おなかも ペコペコ状態で 帰って来たと 思ったら、ものすごく 知的な 女の子と おしゃべりして 最高に 楽しい 時間を 過ごせたなんてね！」

「すてきじゃない。」 プリシラが言った。

「ベルって、すばらしいよ。」

「本当にね、ケン。今言ったこと、全部彼女に聞かせてあげたいわ。最近彼女は、自分のルックスについて悩めるのよ。」

「ルックス？」

「ええ。特に、体重と、手について。」

「体重だって？ だけど、彼女はきれいじゃないか。それに、手だって・・・そう言えば、最初はすわっている時に、手を下にかくしていたなあ。ヘンだと思ったよ。」

「彼女、自分の手のことを気にしているの。」とプリシラが言った。

「そうだね。だけど、いろんなことについて思っていることを言い始めたら、夢中で手を振って話していたよ！ すごく 個性的で 表現豊かな手だよ。」

「ええ。だけど問題なのは・・・あ、ちょっと待って・・・。」

プリシラは一時話を中断すると、キッチン入口にそうっと歩み寄って、ドアを開けた。

「アナベルじゃないの！ だれが泣いてるのかと思ったら、立ち聞きしてたの？」

「ご、ごめんなさい。お、お休みを言いにお下りしてきたら、ケ、ケンの声が聞こえて、わ、私の名前が聞こえたの。」

プリシラは泣きじゃくっている人形がみんなに見られてはざかしい思いをしなくて済むように、アナベルを2階に連れて行きながらたずねた。「だけど、どうして泣いてるの？」

だいじょうぶ？」

「だ、だいじょうぶ。た、ただ・・・ケンが話してたことを聞いて、わ、私、すごくうれしくなっちゃって、な、なみだが止まらないの。」

「それならよかったわ、アナベル。それで、ケンはあなたのミトンみたいな手のことを、何ですって？」とプリシラ。

「え～っと・・・こ、個性的で・・・あの言葉、何だったかしら？」

「表現豊かってことね。つまり、あなたの手は、話していることを強調するのに興味深い動きをするってことよ。」 プリシラは、くつ箱で作ったベッドにアナベルをねかせながら言った。

ということで、その夜アナベルは満ち足りたほほえみを浮かべ、感謝の気持ちでねむりについた。手だけではなく、工場が作ってくれた自分のあらゆる面を感謝しながら。

次の日、アナベルは大たんにも、ケイラの作ってくれたおいしいリゾットを、おなかいっぱい食べた。

